

対人魅力形成に及ぼす態度・人格の類似性の効果

上田 敏見・谷口 勝英

(奈良教育大学心理学教室) (柏原市立柏原小学校)

(昭和59年4月9日受理)

対人魅力の規定因としての類似性に関する研究は、態度 (Byrne, 1961; Byrne and Nelson, 1965, et al.), 人格 (Izard, 1960; Byrne, Griffitt and Stefaniak, 1967; Seyfried and Hendrick, 1973, et al.), 課題遂行能力 (Senn, 1971, et al.) など多岐にわたって行われ、これらの類似性が対人魅力の源となることが示されてきた。

しかしながら、これらの研究は、その多くが単一の要因を扱ったもので、2つ以上の要因の組み合わせを扱ったものは、ほとんど見られない。2つ以上の要因を同時に扱った場合、類似一魅力の関係がどのように変化するのか、未だ明らかにされていない。例えば、態度の類似性は、人格が類似した場合においても、非類似な場合においても、同様に魅力の源になるのであろうか、課題遂行能力が優れている場合においても、類似している場合においても、あるいは劣っている場合においても同様に魅力の源になるのであろうかといった問題が残されているのである。組み合わせによっては、類似一魅力の関係が見られなかったり、逆に、類似一回避の関係が見られたりすることもあるのではないだろうか。

この点で興味深いのは、Novak and Lerner (1968) の研究である。彼らは、刺激人物が情緒に障害があると知覚された場合には、態度が類似している人は、非類似な人より回避されることを示している。この研究は、やや特殊な場合を扱っているが、他の要因がからみ合った場合、態度の類似といえども、常に魅力の源となる訳ではないことを示すものと言えるだろう。

もっと一般的に、態度と人格の類似性と魅力の関係を扱ったものに、Singh (1973) の研究がある。彼は、態度類似一人格類似、態度類似一人格非類似、態度非類似一人格類似、態度非類似一人格非類似の4群を作り、それぞれの魅力を測定した。その結果、態度の類似も人格の類似も魅力の源となるが、態度の類似性の効果は、人格の類似性の効果よりも大きいことを見出している。しかしながら交互作用は全く見られず、態度の類似性と人格の類似性の相互の影響は、単に加法的なものにすぎないことを示しているように思われる。

しかしながら、Singh (1973) のこの研究を、詳細に検討してみると、いくつかの問題点が見出される。第一は、人格を表す修飾語である。彼が用いた修飾語は、Anderson (1968) のリストから選び出された、中程度の Likableness の語であるが、これらの修飾語 (e. g., bold, excitable, impulsive) の中には、自己にとって特に重要なものは見られない。同様に、態度項目も中程度の重要性を持つものが選ばれている。はたして、このようなあまり重要でない項目を用いることが、態度、人格の類似性の相互の影響を検討するために妥当なのであろうか。

本研究では、以上の点をふまえて、態度の類似性と人格の類似性が同時に呈示された場合の、相対的な重要性と、相互の影響の仕方について、Singh (1973) の手続きに準じて再検討する。なお、用いる人格を表す修飾語、態度項目ともに、Singh (1973) よりも、重要性の高いものを用いることとし、類似性操作のときにも、被験者一人ひとりについて、態度では興味の高い項目、

人格ではより重要だと考える項目を中心に、類似、非類似の操作を行うことによって、類似性の報酬価を高めることとする。

方 法

1. 実験計画 2×2の実験計画が用いられた。第一の要因は、刺激人物の態度の類似性（類似：80%一致、非類似：20%一致）であり、第二の要因は、刺激人物の人格の類似性（類似：80%一致、非類似：20%一致）であった。これにもとづいて、態度類似一人格類似（S-S）群、態度類似一人格非類似（S-D）群、態度非類似一人格類似（D-S）群、態度非類似一人格非類似（D-D）群の4群が作られた。

2. 被験者 女子短大生196人が、被験者として用いられた。これらの被験者は、各群が等質になるように、各クラスごとに4群に分けられた。なお、各セッションで回答に不備のあった者、いずれかのセッションに欠席した者は除外し、さらに分析の都合上、合計8人のデータをランダムに除外し、最終的には、1群45人、計180人のデータが分析にかけられた。

3. 材料 (1)態度調査用紙 Byrne (1971) の56項目の態度項目と、増田 (1979) の態度項目とから選び出した37項目について、女子大学生（1回生）45人に、興味ある項目5個を選び出させ、その結果の上位10項目を、態度項目として使用した。選び出した項目は、「アルバイト」「旅行」「自動車の運転免許」「クラブ活動」「ファッション」「友人関係」「音楽」「男女交際」「結婚」「結婚後の家事、育児」であった。態度調査用紙には、これらの項目について1つの意見が述べられ、被験者は、その意見に対して、大変賛成から大変反対までの7段階で答えるようになっている。

(2)人格調査用紙 長島 (1967) の Self-Differential 大学生用の6個の各因子から、負荷量の多い修飾語10対を選び出して用いた。用いた修飾語対は、感情的な—理性的な、無口な—おしゃべりな、まじめな—ふまじめな、角のある—丸い、不誠実な—誠実な、外向的な—内向的な、ひかえめな—でしゃばりな、元気な—病弱な、無気力な—意欲的な、自分勝手な—思いやりのあるである。これらの修飾語対は、それぞれ7段階で評定するようになっている。

(3)魅力調査用紙 Byrne (1971) の IJS (Interpersonal Judgment Scale : どの程度好きかと、共同作業——本研究では共同研究とした——の相手としてどの程度好ましいかの2個の魅力尺度に、4個のバッファ項目を加えたもの) 6項目と、新たに加えた「友達になる」「勉強を一緒にする」「サークル活動を一緒にする」「遊びを一緒にする」の4項目、およびバッファ1項目の11項目からなっている。被験者は、これらの項目ごとに、大変好き（大変やりたい）から大変きらい（全くやりたくない）の7段階で答えるようになっている。また、態度、人格それぞれの類似性知覚の評定項目2項目が加えられ、同様に、大変似ているから全く似ていないの7段階で答えるようになっている。

4. 手続き 実験は2セッションに分けて行われた。第1セッションは、態度、人格について自己評定させるために、第2セッションは、類似操作が施された刺激人物に対する対人魅力を測定するために行われた。セッションの間隔は1週間であった。なお、実験はすべてクラス単位で集団で行った。

(1)第1セッション 態度調査用紙、人格調査用紙を配布し、記名させた後、まず人格項目についての評定を求め、続いて、重要だと思う修飾語対3個を選ばせた。次に、態度項目についても、

賛成、反対のあてはまるところに○をつけるように求め、続いて、最も興味ある項目3個を選ばせた。

(2)第2セッション 第1セッションでの被験者の調査用紙を返却し、それにもとづいて作成された、刺激人物についての情報を与え、魅力を測定した。刺激人物についての情報は以下のように作成された。なお、刺激人物はすべて、被験者と同じ短大の1回生であるとされた。

類似——態度、人格のいずれについても、10項目のうち8項目を、被験者の回答と一致させた。一致項目は原則として無作為に選んだが、被験者が、興味ある、または重要であると答えた3項目は必ず一致させた。残りの2項目は、1段階ないし2段階、被験者の回答とずらせた。

非類似——態度、人格のいずれについても、10項目のうち2項目のみを、被験者の回答と一致させた。一致項目は原則として無作為に選んだが、被験者が、興味ある、または重要であると答えた3項目は除外した。不一致の8項目は、興味ある、重要であるとされた3項目については、3段階ないし4段階、残りの5項目については、1段階ないし3段階、被験者の回答とずらせた。

まず、被験者に、刺激人物についての情報の見方を説明し、その後、調査用紙を返却し、刺激人物についての情報を配布した。それにもとづいて、刺激人物の人格、態度について考えさせた後、魅力調査用紙を配布し、記入を求めた。なお、記入にあたっては、魅力調査用紙の項目は、実験者が1項目ずつ読み上げた。

結 果

1. 類似性の知覚 類似性の知覚についての結果は表1に示した。大変似ているに7点、全く似ていないには1点が与えられた。この結果にもとづいて、分散分析を行った(表2)。その結果、態度の類似性の知覚に関しては、態度の主効果のみが有意であった。これは、態度の類似操作が有効に行われたことを示している。一方、人格の類似性の知覚に関しては、人格の主効果、態度の主効果が、ともに有意であった。人格の主効果が有意であったことは、人格の類似操作が有効に行われたことを示している。態度の主効果が有意であったのは、おそらく、実験の手続き上、人格が示されたときに、すでに態度が示されていたために、被験者は、態度の類似性をも意識して回答したことによると思われる。この点に多少の問題は残るが、類似操作は一応成功したと考えてよいだろう。

2. 魅力評定 各規準における魅力の程度は図1に示した。類似性の知覚の場合と同様に、大変好き(大変やりたい)に7点、大変きらい(全々やりたくない)には1点が与えられた。こ

表1 類似性の知覚

		態度の類似性		人格の類似性	
		類似	非類似	類似	非類似
人格	類似	5.64	2.13	5.82	5.38
	非類似	5.42	1.93	2.29	1.78

表2 分散分析表(要約)

Source	df	F	
		態度の類似性	人格の類似性
1. 態度	1	507.19**	13.27**
2. 人格	1	1.85	739.83**
1 × 2	1	0.00	0.07
error	176		

** P<.01

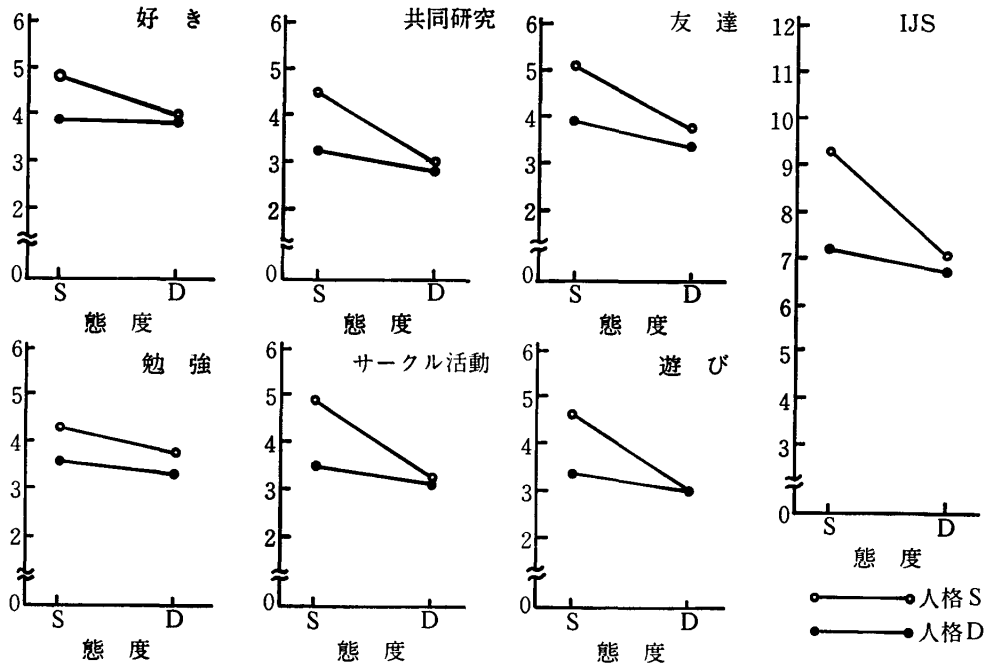


図1 対人魅力

表3 分散分析表(要約)

Source	df	F						
		好き	共同研究	友達	勉強	サークル活動	遊び	IJS
1. 態度	1	10.15**	32.82**	27.98**	5.19*	35.10**	25.52**	22.28**
2. 人格	1	14.87**	17.37**	21.47**	12.15**	21.37**	10.82**	29.23**
1 × 2	1	9.12**	8.20**	6.33*	1.76	12.20**	9.33**	11.79**
error	176							

* $P < .05$ ** $P < .01$

表4 単純効果の検定 (t値)

	好き	共同研究	友達	サークル活動	遊び	IJS
S-S~D-S	4.37***	6.62***	5.51***	6.66***	5.72***	7.15***
S-D~D-D	0.11	2.21*	1.97*	1.65	1.42	1.39
S-S~S-D	4.86***	5.40***	5.05***	5.76***	4.49***	5.76***
D-S~D-D	0.59	0.99	1.51	0.74	0.19	0.90

df=176 * $P < .05$ *** $P < .001$

の結果にもとづいて分散分析を行ったのが表3である。その結果、各規準とも、態度、人格のいずれの主効果も有意であった。これは、態度、人格の類似性がともに魅力の源になっていることを示すものである。交互作用は、「勉強を一緒にする」を除いて、すべての規準で有意であった。そこで、交互作用が有意になった規準について、単純効果の検定を行った(表4)ところ、各規準

とも、S-S 群と S-D 群、S-S 群と D-S 群の間に有意差が見られ、「共同研究の相手」「友達になる」の2規準では、S-D 群と D-D 群の間にも有意差が見られたが、D-S 群と D-D 群の間には、いずれの規準においても、有意差は見られなかった。この結果は、態度あるいは人格の類似性の効果は、他方が類似している場合に顕著に見られ、非類似の場合にはほとんど見られないことを示している。「共同研究の相手」「友達になる」の2規準においては、人格が非類似な場合でも、態度の類似性の効果が見られたが、その効果はやはり、人格が類似している場合よりも小さいものであった。

また、Singh (1973) の結果と対比するために、「好き」「共同研究の相手」の2規準の得点を合計したもの (IJS 得点) を出し、これを分析した。得点は、14点から2点の間に分布する。この結果は、図1にまとめて示した。これにもとづいて分散分析を行ったところ (表3)、態度の主効果、人格の主効果のいずれもが有意で、態度、人格のいずれの類似性も、魅力の源となっていることが示された。また交互作用も有意であったので、単純効果の検定を行ったところ (表4)、S-S 群と S-D 群、S-S 群と D-S 群の間に有意な差があったが、S-D 群と D-D 群、D-S 群と D-D 群の間には有意差は見られなかった。これは、「好き」「サークル活動を一緒にする」「遊びを一緒にする」の各規準と同様、態度あるいは人格の類似性の効果が、他方が類似している場合にのみ見られることを示すものである。

考 察

本研究の主な結果は次のとおりであった。

(1) すべての魅力測定規準、IJS のいずれにおいても、態度、人格の類似性は、どちらも魅力の源になっていた。

(2) 「勉強を一緒にする」以外のすべての規準、IJS において、態度あるいは人格の類似性の効果は、他方が類似している場合に顕著に見られた。他方が非類似な場合、類似性の効果は、「好き」「サークル活動を一緒にする」「遊びを一緒にする」IJS においては見られず、「共同研究の相手」「友達になる」においては、人格が非類似であっても、態度の類似性の効果が見られたが、その効果は、人格が類似している場合にくらべて小さかった。

これらの結果を Singh (1973) と比較してみると、態度の類似、人格の類似がともに魅力の源になるという点では一致し、従来の多くの研究とも一致しているが、それ以外の点ではかなり異なっている。まず第一に、本研究では、Singh (1973) では見られなかった交互作用が見られたことである。態度、人格の類似性の効果は、他方が類似している場合に顕著に見られ、他方が非類似な場合には、全く見られないか、わずかに見られるのみであった。このことは、態度、人格の類似性は、単に相加的なものでなく、相乗的に影響を与え合っているものであることを示していると言えるだろう。次に、Singh (1973) では、人格の類似性の効果が、態度の類似性の効果とくらべて明確なものでなかったのに対して、本研究では、ともに明確に見られたことである。これは、態度と人格の類似性の、魅力形成に及ぼす効果には、それほど大きな差が無いことを示すものと言えるだろう。ただ、「共同研究の相手」「友達になる」の2規準で、人格が非類似な場合にも、態度の類似性の効果がわずかながら見られたのに対し、態度が非類似な場合には、人格の類似性の効果が全く見られなかったということは、態度の類似性の効果が、人格の類似性の効果よりも大きいことを示唆するものとも考えられ、その場合 Singh (1973) の結果と符合する。

それでは、何故このような違いが生じたのであろうか。考え得る最大の理由は、用いられた態度尺度、人格尺度の違いである。Singh (1973) の用いた態度尺度が中程度の重要性を持った態度項目で構成されたものであり、人格尺度も中程度の Likableness の語で構成されているのに対して、本研究では、より興味の高い項目、より重要な語を用いて尺度を構成し、その上、一人ひとりについて、より重要な項目、より重要な語を中心に類似性の操作を行っている。Byrne, London and Griffitt (1968) や、Clore and Boldridge (1968) は、類似の程度が同じ場合、その項目の重要性が魅力に影響を及ぼすと述べているが、本研究の場合も重要性の効果が働いて結果をより明確にしたと考えられる。また、Singh (1973) で交互作用が見られなかったのは、人格の類似性の効果が小さかったために、態度の類似性の効果に影響を及ぼすことがなかったことによるのであろう。

ところで、本研究では、用いた規準によって、態度と人格の類似性の効果の表れ方が少しずつ異っている。これは、以前の研究(上田、谷口 1975 et al.) で示してきたように、規準によって、魅力を形成する源として求められるものが異なることによると考えられるが、それでは何故、この規準でこの表れ方をしたのかは、今のところ明らかでない。また、本研究の結果からは、態度の類似性が、人格の類似性の効果に影響を及ぼしたのか、人格の類似性が、態度の類似性の効果に影響を及ぼしたのか明らかでない。今後は、これらの点を明らかにするとともに、態度、人格以外の組み合わせの効果についても検討する必要があるだろう。

要 約

本研究は、態度と人格の類似性が同時に呈示されたときの、対人魅力の源としての相対的な重要性と、相互の影響のし方を明らかにすることを目的として行われた。196人の被験者が、態度が類似または非類似のいずれかで、人格が類似または非類似のいずれかの刺激人物を、6項目の規準で魅力を評定した。主な結果は次のとおりであった。

(1)態度、人格の類似性は、ともに魅力の源になっていた。

(2)一部の規準を除けば、態度あるいは人格の類似性の効果は、他方が類似した場合に顕著に見られた。他方が非類似な場合には、全く見られないか、態度の類似性の効果がわずかに見られるのみであった。

これらの結果は、態度、人格の類似性の効果が相乗的に影響を与え合っているものであること、態度の類似性の効果が、人格の類似性の効果とくらべてやや大きいことを示すものと解釈された。

引用文献

- Anderson, N. H. 1968 Likableness ratings of personality-trait words. *Journal of Personality and Social Psychology*, **9**, 272-279.
- Byrne, D. 1961 Interpersonal attraction and attitude similarity. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **62**, 713-715.
- Byrne, D. 1971 *The attraction paradigm*. New York: Academic Press.
- Byrne, D., Griffitt, W., and Stefaniak, D. 1967 Attraction and similarity of personality characteristic. *Journal of Personality and Social Psychology*, **5**, 82-90.
- Byrne, D., London, O., and Griffitt, W. 1968 The effect of topic importance and attitude similarity-

- dissimilarity on attraction in an intrastranger design. *Psychonomic Science*, **11**, 303-304.
- Byrne, D., and Nelson, D. 1965 Attraction as a linear function of proportion of positive reinforcement. *Journal of Personality and Social Psychology*, **1**, 659-663.
- Clore, G. L., and Boldridge, B. 1968 Interpersonal attraction: the role of agreement and topic interest. *Journal of Personality and Social Psychology*, **9**, 340-346.
- Izard, C. E. 1960 Personality similarity and friendship. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **61**, 47-51.
- 増田悦代 1979 好意性に及ぼす応答と受け手の態度の効果 奈良教育大学卒業論文
- 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・齋藤耕二・堀洋道 1967 自我と適応の関係についての研究(2)—Self-Differential の作成— 東京教育大学紀要, **13**, 59-81.
- Novak, D. W., and Lerner M. J. 1968 Rejection as a function of perceived similarity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **9**, 147-152.
- Senn, D. J. 1971 Attraction as a function of similarity-dissimilarity in task performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, **18**, 120-130.
- Seyfried, B. A., and Hendrick, C. 1973 Need similarity and complementarity in interpersonal attraction. *Sociometry*, **36**, 207-220.
- Singh, R. 1973 Attraction as a function of similarity in attitude and personality characteristics. *Journal of Social Psychology*, **91**, 87-95.
- 上田敏見・谷口勝英 1975 对人的誘引関係における類似性と社会的望ましさ 奈良教育大学紀要, **24**, 123-133.

<付記> 本実験を行なうにあたり、本学学生高橋正子さんの協力を得た。記して厚く感謝の意を表する次第である。

Effect of Attitude and Personality Similarity on Interpersonal Attraction

Toshimi UEDA

Department of Psychology, Nara University of Education, Nara, Japan
and

Katsuhide TANIGUCHI

Kashiwara Elementary School, Osaka, Japan

(Received April 9, 1984)

The purpose of the present study is to examine the relative importance and the effect of the attitude and personality similarity in interpersonal attraction. 180 female junior-college students served as subjects. They responded to Attitude Survey, Personality Rating Form, and Attraction Rating Form. The experiment was conducted in classroom groups and in two parts, Session 1 and Session 2. In Session 1, attitude and personality measures were gathered, and in Session 2, one week later, attraction toward stimulus persons was rated.

Main findings were as follows:

- (1) Both attitude similarity and personality similarity were sources of interpersonal attraction, in all attraction measures and IJS.
- (2) In all criteria except "study" criterion and in IJS, the effect of attitude similarity or personality similarity was observed most evidently when the other one was similar. When one of them was dissimilar, the effect of similarity in the other was never observed, or attitude similarity only was observed a little.

These results may be interpreted to show that the effect of attitude similarity and that of personality similarity operate dynamically, influencing each other, and that the effect of attitude similarity is a little greater than that of personality similarity.

The obtained results were compared with those reported in earlier studies and some discussion was made in regard to the agreements and discrepancies together with a few suggestions for further analysis.